

## JANARD「東チモール・プロジェクト形成調査」のための研修

### シャプラニールの経験から

04年10月23日 大橋正明  
(シャプラニール代表理事)

#### I. シャプラニールの経験から (ビデオ「ヘルプから共生へ」(2002年作成))

##### 1. シャプラニールの南アジアでの活動とその変遷

###### 1) 前史と第一期 (模索期)

- 71 パキスタンの弾圧、バングラデシュ独立宣言、独立戦争、インド軍介入と独立達成、ヘルプ・バングラの世界的キャンペーン
- 72 「バングラデシュ復興青年奉仕団」(約50名、四ヶ月程度)の派遣  
「ヘルプ・バングラデシュ・コミティ(HBC)」の結成、「バングラデシュの子供たちにノートとエンピツを贈る」街頭キャンペーン開始。
- 73 現地で、数百のノートとエンピツ配布。それを食べ物に換える子どもの姿。通信員を派遣し、情報収集開始。

###### 2) 第二期 (日本人を中心としたある農村での生活向上活動の実施)

- 74 調査のために日本人派遣。ダッカに現地事務所「シャプラニール」開設。この年夏の洪水の被災地のなかから、現地アドバイザーから勧められたマニクガンジ県ポイラ村を活動地とする。日本人が数名が住み込んで、村人に近い生活をしながら、農村開発プロジェクト開始。主に、
  - 女性の手工芸品生産協同組合の育成と生産、
  - 成人や子どもの教育、
  - 食生活改善のための苗木の配布、など村の青年数人を雇用。日本では洪水報道もあって、援助金が集まる
- 77 4月17日、ポイラ村事務所が村人であろう一団によって襲撃され、日本人駐在員二名負傷。村社会の構造、力関係への配慮不足と、日本人の経験不足とそれに基づく軽率な行動が背景か？日本人駐在員を村に置かない形で、最低限の活動維持がその後続く。
- 78、79 バングラデシュでのプロジェクトの新たな方向性を模索。

###### 3) 第三期 (バングラデシュ人ワーカー主導、農村貧困層をターゲットとしたプロジェクト実施)

- 80 新三ヵ年計画の立案と実施：全国六ヶ所の土地無し農民や女性の「ショミティ」を対象とし、バングラデシュ人のワーカー一名が担当。ショミティを通じた社会的経済的地位の上昇と、ショミティの自立を目標。日本人駐在員は原則一名。  
その後一地域を対象に加え、数名のワーカーも採用。間もなく深刻な資金不足に。
- 83 ショミティの数が増え数百に。地域ごとの「地域ショミティ連合会」結成。連合会がリーダーを雇用するという形態。バングラデシュ人ワーカーもその後増加。
- 86 一地域が、地元 NGO として独立。その後支援継続。

87 「地域シヨミティ連合会」の勝手な動きや腐敗をコントロールが上手くいかず、CBOである連合会を改組して、NGOのシャプラニールの活動拠点(CDC)に。リーダーたちは、シャプラニールのスタッフに。東京では、会員総会や役員制度を創設。

88~95 徐々にシヨミティの長期的維持、及びその自立や連合体などへの発展の難しさを認識 (住民組織化の困難さはバングラデシュのNGO界全体に共通する傾向、一方でNGOによるマイクロ・クレジットの普及=組織化より市場参加)

4) 第四期 (プロジェクトの直接実施からパートナーへ、シヨミティから様々な支援への緩やかな方針変更)

96 ネパールでの活動開始。駐在員一人で、現地NGOへの支援で、パートナーという関係。一つは丘陵部の農村開発、もう一つは平野部の少数民族を対象。

97 現地スタッフ百名以上、日本人駐在員二名。現地スタッフが管理への不満と雇用不安から百日間のストライキ。

98 困難な交渉の末、ストライキ解決。長期的に直接のプロジェクト実施が減る事を確認。ネパールで、首都のまちづくり関係のNGO支援開始。

00 バングラデシュの首都のストリートチルドレンをケアするNGO支援開始。

## 2. 現在の現地活動

### 1) バングラデシュ

#### 農村部における農村開発活動：

①ノルシンディ県で二つのCDCを持つPAPRIを支援

②マニクゴンジ県で一つのCDCを持つSTEPを支援

③北部イショルゴンジ県の三つのCDC(地域開発センター)で直接活動、今年度中にCOLIという地元NGOとして分離・独立

-700ほどの貧困層をメンバーとしたシヨミティの育成や研修、資金の貸し出し、

-シヨミティメンバーとシヨミティ周辺に向けて識字学級、ドロップアウトしがちな児童の学習支援教室、井戸・便所の普及、

-シヨミティとは関係なく、青少年グループ育成、最貧層への直接支援の模索、

-洪水などの緊急支援

都市部におけるストリートチルドレン支援：現地NGOオポロジョエ・バングラデシュを通じて、一ヶ所のバスターミナルで青空学級と一箇所のドロップインセンターを支援。子どもは、青空学級で大人やNGOとの新築関係を深め、ドロップインセンターで安心を確保。さらに生活を安定させるための施設があるが、収容優先せず、本人の意思を尊重。

### 2) ネパール

東部丘陵地帯の農村開発：CSD(Centre for Self-help Development)という比較的大手のNGOを通じた、東部のオカルドウンガ郡五カ村における貧困農民層の組織化を通じた支援。バングラデシュのシヨミティ支援とほぼ同様な内容。他にかまど改善。

南西部平野地帯のカマイヤの再定住支援活動：SPACE(Society for Participatory Cultural Education)という現地NGOを通じて、タライ平原の先住民であるタルー族が多いカマイ

ヤ（債務奴隷）が解放され再定住する際の様々な支援。しかし、組織化に伴う社会運動家、政治化に必ずしもついていけず。03年にSPACEとの関係終了し、その後一回だけ緊急食糧支援。現在は方向性を模索中。

首都カトマンズの低所得者層の自立支援：SOUP (Society for Urban Poor) というCBOに近い団体を通じて、ネワール人コミュニティ再建、生活向上の活動を期間限定で支援

首都カトマンズのストリートチルドレン調査：CONCERNという現地NGOを通じて、最近増加しているストリートチルドレンの実情調査を実施。04年度から、元ストリートチルドレンによるNGOと弁護士を中心としたNGOに二つを支援。

## II. 何が問われているか

### 1. シャプラニールの経験から

#### 1) 市民による海外協力の実践

－日本人の役割の変化、相手の変化、私たちの未熟さ

－試行錯誤を許してもらっている現状

＝現地の状況をどれだけ把握できるのか？把握すべきか？

＝私たちは開発の先達者か？金がパワーをもたらしている？

－現地の政治社会状況を理解する必要と、それに直接タッチしにくい、あるいは接近できないという問題（ネパールの元債務奴隷の組織化の例）

－変るべきはバングラデシュ/ネパールか、日本/北か、という本質的な問いかけ

－北と南のNGOの役割分担の明確化

### 2. NGOの役割について：問題指摘、代替案の提示、サービス提供

#### 1) NGOの役割 ⇒ 矛盾の発見者(watch dog)、その代弁者、必要な支援の提供者

発見：難民の人権侵害、巨大開発に伴う強制的立退きや環境破壊、乳児を殺す粉ミルク、貧困の女性化

代弁：人権侵害の訴え、適正な補償の要求、粉ミルクの問題提起、GADやリプロ提案

支援：国交のない国や活動、国家から見放された地域や少数派/弱者へのサポート、あるいはより適正な代替案の実験や提示

### 3. 開発や援助についての本質的問題：変わるべきは途上国の人々か、私たちか？

(1)問題あるいは現象は何か？：途上国での貧困か、途上国と先進国間の開発(所得)のレベルの大きな違いか

(2)その原因は？：途上国での生産の不足なのか、途上国と先進国間の分配の不平等か

(3)どのような対策か：南で農業や工業の生産を増やすのか、先進国の過剰開発、過剰消費の削減と再分配か